宮崎県立日南振徳商業高等学校　　平成２２年６月２８日（月）

# 校長室だより　１７号

中　島　　悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう　伝え築いた　振徳商業
目指せ　三種目　日本一　！

【今週の行事】６月２８日（月）　全商ﾜｰﾌﾟﾛ課外（～7/3日）
２９日～7/2日　期末考査
２９日（火）　第７回閉校行事等実行委員会
７月　２日（木）　第１回評議委員会
４日（日）　全商ワープロ検定

１　田植え、芝植え、工事音　　河野絹子　　10周年記念誌より抜粋
２　出逢ったいい話　「天国にいるおとうさま」　『致知』2007年3月号より抜粋

## 「田植え、芝植え、工事音」（原文）　２回卒　　河野　絹子

早いもので今年で創立１０周年、２期生である私の思い出は、１期生の方とだいたい同じだろうと思います。まず目に浮かんでくることは、次々にできる校舎の工事音がうるさくて教室をあっちこっち移動しながら学んだことです。先生の話声が聞きとりにくくて大変でした。次に浮かぶのは、自習時間がすぐ作業時間に変わり、体操着に着替えて運動場や校門近くを整備したことです。その中でも全校生徒がまるで田植でもするかのように一列に並んで、芝植をしたことは昨日のことのように思い出されます。みんな気持ちを力を合わせ、一生懸命やったんだってこと、いつまでも心に残ることでしょう。次に思い出されることは振徳街道のことです。私達の通っていた頃は、天気の良い日はまっ白にほこりをかぶり、雨天の日はぬかるみをすべらないように歩きました。今はもうすっかりきれいに舗装されていますので、以前のようなことはないと思います。私達が体験したこと、今の在校生にはピンとこないかもしれませんが、色々な設備ができあがった中で学べるということ、幸せに感じていただけたでしょうか。
どうか、高校生活３年間を悔いなく過ごしてほしいと思います。

## 出逢ったいい話「天国にいるおとうさま」～あしなが運動に命を燃やした四十年～ 交通事故遺児を励ます会会長・岡嶋信治さんの記事より

～　以下は、非道な酔っぱらい運転に大切なお姉様の命を奪われ、40年以上にわたり交通事故遺児救済活動を続けてこられた岡嶋信治さんの記事抜粋です～

交通遺児の84％が父親を失い、38％が生活保護や奨学援助を受ける貧困層に転落していました。母親の切なる願いは、残された子ども達の将来でした。高校、大学への進学でした。苦しい立場の人たちが声を上げなければ何も分かってもらえない、と実感していた私たちは、遺児の家庭へ一軒一軒訪問して執筆を依頼しました。

肉親を失った子ども達の悲しみは当然深く、最初はとてもペンを手にできる状態ではありません。私たちは子どもたちの立ち直りを見守りながら適宜訪問を重ね、１つひとつ作文を入手していきました。

そうして小・中学生の子どもたちから13篇、母親から12篇集めた文集『天国にいるおとうさま』が出来上がりました。

表題にもなった中島穣（みのる）君の作文は、玉井先生がレギュラー出演していた人気番組『アフタヌーンショー』で紹介されることになりました。

「天国にいるおとうさま」　中島穣（10歳）

ぼくの大すきだった　おとうさま
ぼくとキャッチボールをしたが
死んでしまった　おとうさま
もう一度あいたい　おとうさま
ぼくは
おとうさまのしゃしんを見ると
ときどきなく事もある
だけど
もう一度あいたい　おとうさま
おとうさまと呼びたい
けれど呼べない
どこにいるのおとうさま
　もう一度ぼくをだいて　おとうさま
　ぼくがいくまで　まっててて
　もう一度ぼくとあそんで　おとうさま
　おとうさま　ぼくといっしょに勉強してよ
　ぼくにおしえてよ
　おとうさま　どうして三人おいて死んだの
ぼくは
今までしゅっちょうしてると思っていた
おとうさままってて　ぼくが行くまで
おとうさま　おとうさまぁ
もう一度「みのる」って呼んで
ぼくもおとうさまと呼ぶから
ぼく「はい」と返事するよ
ぼくは　かなしい
おとうさまがいないと

番組の中で中島君が朗読を始めると、司会の桂小金治さんがボロボロと涙を流し始めました。回りのスタッフも皆目頭を押さえており、スタジオの様子が画面を通して全国のお茶の間へ届けられました。新聞各紙もこの文集をこぞって取り上げ、入手を求める電話が朝から晩まで鳴り続けました。

（中　略）

警察庁の統計では、交通事故による死者は年間5000人にまで減少していますが、これは事故の直後に亡くなった方の数しか含まれておらず、実際に命を落とす人の数はその３割増しといわれています。人生一瞬先は闇と言い、自分の身に明日何が起こるとも限りません。どうかこの問題を人ごとと思わず、一歩前へ足を踏み出し各々のできる範囲で力を貸していただきたい。そう切に願います。

私自身も、一人ひとりが与えられた命の尊さを深く自覚し、支え合って生きる社会の実現へ向け、命の炎を最後まで燃や続けて生きていく覚悟です。